

## 一 五行志と干宝『捜神記』

〈報告〉

佐 野 誠 子

私は今回、五行志と干宝の『捜神記』との関係についてもう一度考えようと思います。まず『捜神記』には二十巻本、八巻本、敦煌本という三種類の代表的な版本があります。そのうち八巻本と敦煌本は民間的なものであり、原本とはあまり関係なく、明末の万暦年間に突如現れた二十巻本が原本に一番近いといわれています。しかし、二十巻本も原本そのままではないということが明末から清にかけて既に指摘されており、例えば『四庫提要』でもそのことが述べられています。<sup>(1)</sup>特に二十巻本の中でも問題にされてきたのが巻六、巻七に収められている正史の五行志を丸写しにした部分で、『四庫提要』では巻六、巻七は『漢書』と『統漢書』の五行志を収録しており、『統漢書』を編んだ司馬彪は、干宝より前の人だから、干宝は『統漢書』を見ることができたろうけど、このように一文字も変えないで記録しているのはおかしいということを述べています。

近人の研究でも五行志と『捜神記』の関係を考えようと、文章の比較が行なわれていますが、その場合現行の二十巻本の巻六、巻七にばかり拘って考えている節がありました。それに対し小南先生の書かれた「干宝『捜神記』の編纂」<sup>(2)</sup>の第三章では『法苑珠林』の巻三一、三二には『捜神記』が十数条まとめて引用されていることから、その引用の形態が原本をかなり反映しているのではないかといっておられます。そして『法苑珠林』に見える『捜神記』引用条の配列は、はじめの方に五行志からの引用があり、その後に志怪書的内容の話があるという形になっています。小南先生のお考えが正しいとすれば原本の『捜神記』にどのように五行志が引かれていたのかという構成までわかりますから、もう一度どうして五行志を引用したのかを考え直す必要があります。

この問題に対しても、もちろん小南先生はお考えを述べていらっしやいます。例えば「干宝『捜神記』の編纂」<sup>(2)</sup>で

は、干宝は『易』を原理と考えていて、『搜神記』が収めている事象の話は、五行志的な部分が核になり、それから関心がどんどん広がって志怪書と同じような内容の話を収録していった、と述べておられます。

それに対して、私は修士論文で「五行志と志怪書」という題目で、全体的に五行志と志怪書はどこに共通点があり、どこに違いがあるのかということ考えたので、少し思うところがあり、再検討をしようと思いました。

### 『搜神記』所引五行志条の内容

まず問題なのは『搜神記』に引かれていると確定できる五行志の内容についてです。『法苑珠林』に配列が見えるというので小南先生も一覧表を作られています。ここに並べられている五行志の条の配列は、実際の五行志とは無関係になっています。五行志にはいろいろな災異事象の名称があり、例えば罰、妖、孽とか、災や痾というものがあり、それがきちんと五行の一つ一つの本や水といった要素に分類されて並べられています。それは歴代の『漢書』から『清史稿』に至るまで守られています。『法苑珠林』の引用箇所はそのような配列を全く無視していて、五行志的な世界とは違うという印象があります。

それから『法苑珠林』などに引かれている五行志の条の内容は、志怪書と五行志に共通して見られる話に偏っているという印象があります。例えば『法苑珠林』巻三一、巻三二に収められている話は、主に変身や異類婚の話、竜が現れたというような話ですが、そのような話は他の志怪書にも見られるものです。それに対し、五行志の怪異の中でも都に黄色い色の気が発生したとか、血の雨が降ってきたという話は引用されておらず、五行志の全ての怪異事象を記録したわけではないという気がします。

## 『搜神記』の解釈

五行志と志怪書を比較した時に、根本的な違いといえることがあります。五行志は災異事象の記録という意味もありますが、本来は災異事象自体よりも、災異事象をどのように解釈したかという、解釈者の意見を並べることの意味があつたようです。これは『漢書・五行志』の序文等を読むとわかります。しかし、志怪書には基本的にこのような解釈は見られません。それなのに『搜神記』には五行志からの引用条に解釈が見られます。この解釈の部分を『搜神記』がどのように扱っているのかを考えてみたいと思います。

この場合でも従来の研究のように巻六、巻七の条に拘るのではない方法を取りたいと思います。今見られる二十巻本の校注本では汪紹楹先生が、「本条見」として唐宋時代の類書で『搜神記』からとして引用している書名を挙げています。「本条見」に書名が挙げられている条は『搜神記』にもともと存在した可能性が高いということになります。そして更に「本事見」の箇所には、『搜神記』から引用されているわけではないが、同じ内容の話が見える書物を指摘しており、「本事見」にしか書名が挙げられていない場合、その条が『搜神記』に存在したかどうかは微妙になります。そこで、とりあえず確実に原本に存在したであろう「本条見」に書名が挙げられている条のみを対象とし、現行の二十巻本の文章のみならず類書に引用されている文章も確認しながら、五行志の文章と比較をしてみました。これは歴代の五行志毎に事情が違うので別々に扱います。

まず『漢書・五行志』ですが、これは班固によつて編まれたので、当然干宝よりも前の書物です。当然ながら干宝は見ることができ、『漢書・五行志』に見える災異事象の叙事の部分はほぼそのまま引用しています。そして解釈ですが、『漢書・五行志』は解釈者が何人かいます。董仲舒、劉向・劉歆親子をはじめ、その他にも漢代の災異学者達の名前が序文に挙げられており、その人達の解釈が採用されています。その解釈の文章と『搜神記』の五行志と重複

する文章を比較した時、ここに資料として挙げたのはあまりいい例ではないのですが、主に京房の『易伝』を中心に採用し、董仲舒など他の解釈を削除しているのがわかり、解釈を干宝が自分で選択していると考えられます。

私はまだ干宝の災異解釈のことや、易の解釈については勉強不足なのではつきりとはいえませんが、ここには干宝の思想態度の表明というべきものがあつたと考えられます。

次に『統漢書・五行志』との比較ですが、これは先ほどの四庫提要にあつたように司馬彪が干宝よりも前の人なので干宝が『統漢書・五行志』を見た可能性があります。しかし、実際に比較をすると『捜神記』と『統漢書・五行志』の文章はあまり一致しません。一致するのは応劭の『風俗通義』の方です。これは小南先生が以前書かれた『捜神記』の文体<sup>(4)</sup>でも、『捜神記』は『風俗通義』をほぼ原典そのまま引用しているという指摘が見られます。『風俗通義』と『捜神記』の文章を比較した時に、『風俗通義』では末尾に応劭が解釈というほどではないのですが、考えを述べている部分があります。その部分を干宝はほとんど削除しています。応劭という人は『統漢書・五行志』の序文でも、「応劭などの記録を用いた」と名前が挙げられていますが、本文には「応劭曰」と、応劭の考え方を引用した部分は一つもありません。多分これは『統漢書・五行志』が、序文で挙げている人の書物に見える事象の記録は利用したけれども、解釈は無視して、別に解釈を附したのだと思われれます。

干宝ももしかしたら、応劭のような考え方には賛成していなかったのではと考えられます。ただ一つ問題なのは、服装の流行に関する記述が『捜神記』によく見られます。このような記述は『風俗通義』にもよく見られます。服装の乱れというのは五行志で服妖という災異事象に分類されますが、このような記述は志怪書には全く見られず、『捜神記』だけに例外的に見られるものです。そして、その部分が『風俗通義』とだけ一致します。『捜神記』と『風俗通義』の関係については別に考えてみたいと思っています。

最後に『宋書・五行志』は梁・沈約によって編集されていますので、当然干宝より後の時代です。『宋書・五行志』

の中には「干宝曰」と、干宝の解釈が見られます。これをただ現行『捜神記』の巻七とだけ比較すると、巻七の文章は『宋書・五行志』をもとに編まれた『晋書・五行志』の中から「干宝曰」だけを削った形になってしまっていますが、類書に引用されている『捜神記』の文章と『晋書・五行志』の文章を比べると、類書に見られる文章の方が全体的に解釈が短めになっているといえます。また『宋書・五行志』の「干宝曰」がある条にどのような事象が多いかを調べたところ、先ほど述べたような志怪書と重複しやすい話に限られず、例えば自然災害の記事に対しても「干宝曰」という解釈が見られます。しかしそのような条は、『捜神記』には佚文としても見られません。この事実からすると、干宝はもともと『捜神記』とは別に災異解釈の書物を著していて、その中から『捜神記』にふさわしい内容の話だけを解釈を省略して収録したのではないかという気がします。

### 『捜神記』に見える古書の引用

以上五行志と『捜神記』の引用関係を調べましたが、『捜神記』には五行志以外の書物でも、古い書物からの引用が見えます。これは『捜神記』序文でも、歴史記録のことについて述べ、「古い本から引用して間違っているとしても私の非ではない」と自分の逃げ道を作るようなことを述べていますので、古い書物からの引用が多く存在していた可能性があります。そこで、校訂本の「本事見」で挙げられている書と、唐宋の類書に引用されている『捜神記』の文章とを比較してみました。

まず、「本事見」の条で特に目立つのは、『呂氏春秋』『淮南子』『論衡』の三つの書名です。これは内容は重複していますが、文章に関しては、索引などで調べても、三書の中でどの本をよく見ていたのかということはあまりはつきりしません。ただ、これらの本からそのまま写していると思われる部分も見られます。その場合問題なのは、『呂氏春秋』『淮南子』『論衡』は五行志とは思想的に全く異なる書物であることです。『淮南子』には災異思想が見えると

いう論文を読んだことがあります。その思想は五行志などに比べると、理論の完成度が低いとされてきました。<sup>(5)</sup>そこで、五行志とは異なるものと考えるべきだと思えます。

この他『捜神記』には五行志以外の歴史書として『漢書』列伝と『東觀漢記』からそのまま引用している例も幾つも見られます。『東觀漢記』は失われていきますから、類書の文章同士を比べるのですが、文章は大体一致します。また『漢書』の場合、五行志と異なりもとの文章が短く完結していないため、辻褃が合うように変更がされていますが、干宝が一番記したかったと思われる怪異を記した部分の文章はほぼそのままになっています。

他に、歴史書に事実のみの記述が見えるもので、『捜神記』では、非常に長く細かく描写されている話や、孔子に関する話のように荒唐無稽なものになっている話があります。こういう文章は『列異伝』や緯書の佚文などに同文が見えます。『列異伝』に関しては小南先生の『捜神記』の文体」という論文の注釈で『列異伝』は『捜神記』より後の書物ではないか」としていますが、私は逆に『列異伝』が先ではないかと思えます。なぜかというところ『列異伝』を全体的に見た時、『捜神記』のように古い本の文章をそっくりそのまま写しているところがありません。それに対して干宝は今まで述べてきたように色々な本から文章の引用をしています。すると『捜神記』の前に『列異伝』があり、『列異伝』のような怪しげな書物からも干宝が丸写しをした可能性が考えられるのです。

このように『捜神記』は、過去の記事は文献に頼って収めていると考えられます。例えば他の志怪書ですと、原本は残っていないので『古小説鈎沈』などで見るほかありませんが、例えば漢の武帝のことや、神話的なことを記している場合、取材した書物はあまりはつきりせず、『捜神記』のように歴史書からそのまま引用したという例は見られません。『捜神記』の特徴として、書物から過去の記事を引用していることがあると思えます。

後漢から自分の生きていた晋代の記事に関しては、『捜神記』の編纂」の第四章の三「語りの場と『捜神記』の内容」という節で、小南先生が考証していらつしゃいますが、語りの場から取材するなど、歴史家として様々な取材方

法があつたのだと思います。

### 『搜神記』が古書を引用する意図

最後になりますが、『搜神記』はどうしてこのように古い書物を引用したのかを自分なりに考えてみました。『搜神記』には篇目があるということが昔からいわれてまして、広島大学にいらした森野繁夫先生に『搜神記』の篇目<sup>(6)</sup>という論文があり、小南先生も『搜神記』の編纂<sup>(7)</sup>でこのことを取り上げていらっしゃいますが、変化篇や神化篇、妖怪篇、鬼神篇など全部で八つの篇があつたと推測されています。これとは別に小南先生は『搜神記』の思想が五行志的なものから志怪のものに発展したと考えておられますが、この時に問題なのはこの変化、妖怪、鬼神というような用語は、五行志とは全く関係がない言葉だということです。特に顕著なのが「妖怪」で、この妖怪篇冒頭の議論とされる文章を資料に挙げておきました。<sup>(7)</sup>この文章には妖怪は「五行に基づき五事に通ず」とあります。五行五事と妖怪は関係していると説明していますが、実は妖怪という言葉は五行志には一切見えません。これはつまり千宝の独自の考えといつていいと思います。また『搜神記』中の他の「妖怪」という言葉の用例を調べますと、化けて出た物の怪のような意味で使っています。一方五行志には妖怪という言葉はなくても、京房『易伝』の解釈に「妖」という言葉が多く見られます。その妖は何を表しているかというところ、ある事象が起こり、それが何かの予兆である場合、その現象のことを妖と呼んでいるのです。

それに対し、『搜神記』の妖怪はもつと具体的な気味の悪いもので、それがおそらく『太平広記』の「妖怪篇」に見られるような、気持ちの悪いものが出現してその人が死んだというような話に繋がっていくのだと思います。<sup>(8)</sup>

それから「鬼神」篇の問題ですが、小南先生が「鬼神篇」があつたのではと初めて指摘されました。その根拠として「千宝『搜神記』の編纂」(上)で、千宝は清談で「鬼はいないんだ」という机上の空論が盛行していたのに反論

しなかったのではないかとしておられます。この「鬼神」、「鬼」というのは、五行志には全く出てきません。そこで『捜神記』に「鬼神篇」があつたとしても、そこには昔の五行志的な記事というのは引用のしようがありません。

では、干宝の同時代の記事と過去の記事の間にはどのような関係があるのでしょうか。現行の二十卷本の卷一一に「諒輔」という条があります。<sup>(9)</sup>これは後漢時代の諒輔という人が、役人をやっていた時に日照りになり、薪を積んで、自分の身を焼こうとしたところ、ようやく雷雨が起こったという話があります。それに対し二十卷本の卷八に湯王が雨乞いをしたという話があります。これは私が調べたところ、『呂氏春秋』の文章を襲っていて、同じ文章が『太平御覽』卷一一にも『捜神記』からとじて見えています。この話は『呂氏春秋』から引用され原本の『捜神記』に収められたといつていいと思います。ここでは湯王が日照りになった時に自分の身を清め、自らを犠牲にしたら大雨が降つたと書いてあります。五行志には色々な災害の記事がありますが、ただ災害があつたというだけの記録は『捜神記』には引用されていません。しかしこのような災害克服の話、雨乞いをして雨が降つてきたという話は、卷一一に後漢時代の同じような話が二、三篇見られます。

『捜神記』の編纂方法について、私の考えは、干宝自身が「語りの場」なりで取材した同時代の不思議な話があり、それを分類して記し、過去にそれらと同じような話はないかと調べて見つけた話を篇の前の方に置き、昔も今も同じようなことがあつたのだと並べていったのではないかとということです。

すると先ほどの『法苑珠林』の場合は、異類婚姻の話などは五行志にある程度近い話があつたので、はじめに配列したということになると思います。

このように『捜神記』が記そうとした事柄自体は、他の志怪書とそのテーマの点からみてずれてはいないと思います。ただ『捜神記』が他の志怪書とは違うのは、記録しようとするほぼ同時代の話に対し、その起源をわざわざ古い書物に求めて引用したところにあるのだと思います。『初学記』に「進捜神記表」という文章が引用されていますが、こ<sup>(10)</sup>



の文章でも「古今の怪異非常のことを撰して記し、散逸したものを集めて一貫させる」と述べています。その時に干宝は『易』の注釈をしたり、災異解釈をしたりする人ですから、『漢書・五行志』などは、普段から読んでいた書物だと思います。つまり、『搜神記』は五行志を核に作られたというよりも、五行志の一部に、自分が記したい話と似通った話があったため、資料として引用したのだと解釈できると思います。

### 〈小南先生のコメント〉

干宝の関心の中心はあくまでも当時の東晋という社会であって、当時の社会の中における諸事象を理解し位置付けるために色々な工夫をした。その一つが、現在と同じような事象が過去にも起こっているということを強調するため、まず過去の事象を書き、それと共通性を持つ現在の事象を記録した。更にそれをまとめる形で幾つかの篇を作って、それぞれの篇にはそれを理論付ける文章がついていたのだと考えています。

その時に干宝の興味の中心にあったのは、現在の社会の常識から見ると異常現象であって、それを位置付けるためには、それが彼の理論の全部ではないにしても、五行思想を引っ張ってくる必要があった。干宝の易学や五行解釈は、劉向の『五行伝』をそのままあてはめたというより、京房の易学的方向に流れる点が多かった。だから必ずしも『漢書』などの五行志そのままではなく、洪範五行伝なんかの解釈とは少し異なった流れになるのではないかと思えます。ただ、現在の『搜神記』をもう一度素材にまでばらして、干宝の五行志的な社会観でどのように構成し直すことが可能かを考えましたが、なかなかわからなくて、そのために『法苑珠林』の配列なんかを何とか手がかりにしようとしたのですけれども、その復元が全部正しいかどうかはなんとも決められないという現状です。

それからもう一つ、干宝の『搜神記』とそれ以後の志怪小説では違う点が相当大きくて、やっぱり干宝の『搜神記』は一つの時代を開く書物であって、新しい時代を開く書物であればこそ理論化することが必要であった。干宝によつ

て理論付けされてしまえば、それ以後の作品には理論的な部分には必要ない、面白くないものだということ、あとの志怪小説はもっぱら現実の怪異だけを書くことになったのではないかと思えます。

『列異伝』の位置付けが、干宝『搜神記』より後かということはまだ未解決の問題であって、曹丕だとか張華が書いたという伝説はもう一度疑つてみる必要があります。私は『搜神記』と『列異伝』と重なる文章を比べてみると、『搜神記』の中でも相当面白い文章と重なるものばかりが『列異伝』の中にも入っているんですね。『搜神記』の中でも面白い話が『列異伝』から来ているのではなく、逆の方向、『搜神記』の中の面白い話を選ばれて『列異伝』に収められたのではないかと考えたわけです。もう一つには、『搜神記』には志怪小説という一つのジャンルを開く性格が見える。『列異伝』は、『搜神記』によって開かれたジャンルの中にある作品の一つだと考えたのです。これだけのことは『列異伝』の年代は決まりません。必ずしも結論とは思っていないというわけです。

### 〈討論〉

佐野：『搜神記』が志怪書の中で最も重要であるということには全く異論はないのですが、例えば他の書物でも、もしかしたら鬼神篇、妖怪篇のように内容を分類して、配列してあり、冒頭に議論があったという可能性があると思えます。例えば志怪書とはずれますが、梁の元帝蕭繹が撰した『金楼子』に志怪篇という篇があり、志怪篇の序文は干宝の篇と同じように用例を引用し、古い書物から変化の例を順に挙げています。『搜神記』が理論付けたから他の書物は面白い話だけ並べました、という感じではないような気がしています。

小南：いわれるとおりで、志怪小説の諸作品には完全なテキストが伝わっていないからなんともいえないのですけれども、『異苑』などは相当原本の形を残している可能性がある。それから梁代というのは、ある意味で南北朝の文化をもう一度総合する時期で、だから『文選』が作られたり、『文心雕龍』が作られたりする。そういった時期なので、

志怪書についてももう一度、集大成が行なわれ、『金樓子』などにも先祖がえりしたという意識があったかも知れないと思います。なにせ志怪小説にはほとんど現在信頼できるテキストが伝わっていないので、元来そういうものではなかったといわれれば、反論することができません。申し訳けないのですけれども。

戸倉：佐野さんが小南先生のご研究を読んで一番気になったところは、『搜神記』は五行志を中心にして発展したという個所で、本当にそうだったのだろうか、というところを今回発表してくれたわけです。小南先生のお話では、『搜神記』は他の書とは違う時代を開く書だったということですが、やはり中心には五行思想があった、本が出来上がっていく過程で、五行志的なものによる理論付けがかなり大きかったというようにお考えですか。

小南：はい。もちろん五行思想だけではないと思います。ただこの思想が相当重要な働きをしたとは思っています。京房易というのは、詳しくはわからないのですけれども、易については古い漢代の象数易、特に京房易的なものが中心になっていったのではないかと想像します。

それからもう一つ、干宝の『晋記』に五行志的な内容があったのかどうかですけれども、もしかすると、そこに「干宝曰」と引かれているのは『搜神記』ではなくて、干宝『晋記』の一部分にそういったものがあつた可能性があります。特に『宋書』などの引用にはそういった可能性が十分あると考えます。ただそれぞれの記事の最後に干宝の解釈がついていたかどうかは慎重に検討する必要があると思います。

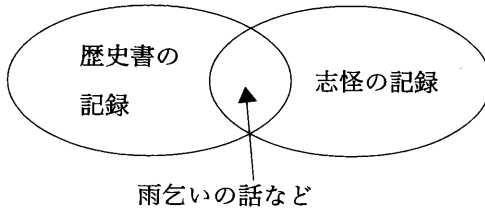
佐野：小南先生は干宝と同時代に五行志が熱心に書かれていたということを、『史通』を引用して説かれていたと思えますが、私は五行志全体の歴史を見た時に、この時期は記録をしようということにはある程度熱心ではありましたが、災異解釈の学問は衰退期にあつたと思います。実際『史通』では、司馬彪と臧荣緒の『晋書』と、『宋書』と、蕭子顯の『齊書』に五行志があつたとしていますが、この中で今見られないのは臧荣緒の『晋書』だけで、あとは正史として残されています。そして他の著者による『晋書』の輯本を見ると、あまり五行志に関係した条もありません

し、撰者でも災異思想と関わっていた人がいません。このように全体の数から考えると歴史書の編纂者全員が作っていないように考えられるのと、『宋書・五行志』が『漢書・五行志』の考えを理解せずにただ表面的に似たような記事を引用しているということがあります、私はこの時代すでに五行志は盛んではなかったと思っております。

小南：干宝の時代には、五行志的思考は衰退期にあった。大きな流れはその通りだと思います。ただ怪異的なものを社会と結びつけ理論化しようとするとき、当時の中国の知識人として、それ以外の理論は探せなかったのではないかと思います。

溝部：佐野さんが今日発表されたことは少しずれるかもしれませんが、以前この会に備えて授業の中で佐野さんがプレ発表をした時には、小南先生は『法苑珠林』の配列を参考に元々の『搜神記』の配列を推測したこと、その際干宝にはまず証明したい理論があつて、それも裏付けるために実例を集めていったということ、論文の中でおっしゃっていると同解した上で、それに対して佐野さんはむしろ干宝が様々な実例に出会う過程で、理論を構築していったのではないかという意見をいわれたように記憶しています。私はそのところが一番気になりました。まず佐野さんに補ってもらつてから、先生のお考えをお聞きできればと思います。

佐野：竹田晃先生は『晋紀』と『搜神記』を比較して、干宝は『晋紀』に書けなかったことを『搜神記』に収録したのではとおっしゃっています。<sup>(10)</sup>これは多分妥当な考えで、例えば『史通』で『晋紀』と『搜神記』に関する評価を見ると、干宝が『晋紀』で書かなかつたものを唐初に編まれた『晋書』は入れているからいけないとしています。これは逆に『晋紀』は『史通』から見てもおかしなことは書いていなかったのだと考えられます。一方『搜神記』に関しては荒唐無稽なもので、孔子や揚雄も相手にしないという批判が『史通』にあります。私が今考えていることですが、正史の中に記録すべき話の範囲が、後漢頃から少しずつ拡大してきた、例えば国家に関わることでなくても、個人的なことでも収録されるようになってきたように感じられます。例えば諒輔の話の、雨乞いをして雨が降ってきたとい



う話にしても、神話には湯王が雨乞いをしたという話はありませんが、一般の役人が雨乞いをしたら雨が降ってきたという話は後漢以降には見られません。それは『後漢書』に収録されている場合もあれば、収録されていないから他の志怪書に見えるという場合もあります。地方官の雨乞いのような話が歴史として記録されるようになり、そこから志怪書のように、無名の人が鬼に遭遇した話や、再生した話が記されたのだと思います。再生の話も五行志に見られますが、雨乞いの話というのは、志怪書と正式な歴史書を繋ぐ部分にあるのではないかと思います。干宝が『晋紀』を書いた時は図の左部分の話のみを記録し、雨乞いの話も含まれていたと思います。そして図の右部分が志怪になったのではないかと思うのです。

歴史意識における記述の対象が広がり、右部分も歴史として意識されるようになったのだけれど正史には収められないという意識があり、そのような話だけを集めて志怪書になったのではないかと考えられるのです。何かが現れたことが死の予兆だったという話も『左伝』や『史記』だと本当に立派な王侯貴族に対してしか記録されないのに、後漢や三国になると普通の人も死ぬ前に犬の行動がおかしかったなどと書かれるようになり、無名の人に降りかかってくる不思議なことも、歴史として意識されるようになったのではないかと考えています。

小南：古い記録の中にも合理的に考えられる部分と、非合理的な部分があって、例えば『左伝』などではいろんな不思議な話がたくさんあるわけですね。ただそれを、さっきもいわれたように主君だとか国家の範囲でだけ考えていたものが、より広く一般民衆にまで関心が広がっていったことは確かです。そうした関心は必ずしも政治的事件についてだけではなくて、例えば『後漢書』というのはいけつたいな書物で普通の正史には入れなくていいようなことがたくさん書いてあるんですね。旦那さんが奥さんに頼まれて穀物を干していたら、雨が降ってきた。ところ

が書物を読んでいて気がつかず、取り込むの忘れて奥さんに怒られた、というような話が書いてあります。普通の正史に書く必要のないことなのですけれども、そういうことも書くという興味が、六朝人には出てきて、六朝になると人間の捉え方が大分変わってきたのだと思います。それまでのような政治的人間だけではない範囲が描写の範囲に入ってきたからそういうことも記録されるようになったのだと思います。

溝部：それでそういう話を干宝が『搜神記』に編纂した際に、先生のご論文では、干宝にはまず理論として定着したという意図があり、その後色々な例を古今の書物から集めてくるという形で成立したのではないかとおっしゃっているように思いました。一方佐野さんは逆に干宝は、自分自身の身辺に起こった不思議な事柄を通じて、理論を構築していったのではないかと、言っているように思うのですが、そのところの御説明をお願いします。

小南：干宝自身の最も大きな興味は当時の現実社会にあつて、現実にかういうことがあるということが証明するため、過去にもかういうことが起こっているという事例を引用したのだと思います。さらにそれを理論的に実証しようとして、五行志的な議論が用いられたのだと考えます。書物としての構成では理論がまず出て、それを証明するような現実の事象が記されていますけれども、現実の事象と過去の事象が二つ挙がっている場合には、干宝の興味を中心は現実の事象にあつたと思います。

戸倉：理論があつてその実例のために編まれたのではないかと、かういうように溝部さんは読んでいた。先生がおっしゃられているのはそうではない、書物の形にしようとするかどうかというように理論が先になる。編集意図としては佐野さんの考えとそんなにずれていないということですね。

注

(一) 『四庫提要』至於六卷七卷、全録兩漢書五行志。司馬彪雖在寶前、續漢書應見及、似決無連篇鈔録一字不更之理、殊爲可疑。

- (2) 『東方学報(京都)』六九、七〇、一九九八、一九九九。
- (3) 『搜神記』二十卷本卷六「狗與豕交」(『法苑珠林』卷三二) 漢景帝三年、邯鄲狗與豕交。是時趙王悻亂、遂與六國反、外結匈奴以爲援。『五行志』以爲犬兵革失衆之占、豕北方匈奴象。逆言失聽、交於異類、以生害也。京房『易伝』曰「夫婦不嚴、厥妖狗與豕交、茲謂反德、國有兵革。」
- 『漢書・五行志』
- 大禍漢景帝三年二月、邯鄲狗與豕交。悻亂之氣、近犬豕之禍也。是時趙王悻亂、與吳、楚某爲逆、遣使匈奴求助兵、卒伏其辜。犬兵革失衆之占、豕北方匈奴象。逆言失聽、交於異類、以生害也。京房『易伝』曰「夫婦不嚴、厥妖狗與豕交、茲謂反德、國有兵革。」
- (4) 『中国文学報』二二、一九六六。
- (5) 村田浩『淮南子』と災異説(『中国思想研究』一四、一九九二)。
- (6) 『広島大学文学部紀要(文学)』二四一三、一九六五。
- (7) 『搜神記』二十卷本卷六「妖怪」妖怪者、蓋精氣之依物也。氣亂於中、物變於外。形神氣質、表裏之用也。本於五行、通於五事。雖消息升降、化動萬端。其於休咎之徵、皆可得域而論矣。
- (8) 楠本堯二『五行志』と「妖怪」——「太平広記」の妖怪——(和光大学人文学部紀要)三三三、一九九八)は、『太平広記』の妖怪篇は各微篇に比べてより妖怪が具体的に人間に働きかける話になっていると指摘している。
- (9) 『搜神記』二十卷本卷二「諫輔」(『芸文類聚』卷一〇〇・災異部・祈雨にほぼ同文が見える) 後漢諫輔、字漢儒、廣漢新都人。少給佐吏、漿水不交。爲從事、大小畢舉、郡縣斂手。時夏枯旱、太守自曝中庭、而雨不降。輔以五官掾、出禱山川、自誓曰「輔爲郡股肱、不能進諫納忠、薦賢退惡、和調百姓、至令天地否隔、萬物枯焦、百姓喁喁、無所控訴、咎盡在輔。今郡太守内省責己、自曝中庭、使輔謝罪、爲民祈福、精誠懇到、未有感徹。輔今敢自誓、若至日中無雨、請以身塞無狀。」乃積薪柴、將自焚焉。至日中時、山氣轉黑起、雷雨大作、一郡沾潤。世以此稱至誠。
- 卷八「湯禱雨」(『呂氏春秋』)及び『太平御覽』卷一一・天部一一・祈雨にほぼ同文が見える)
- 湯既克夏、大旱七年、洛川竭。湯乃以身禱于桑林、剪其爪髮、自以爲犧牲、祈福于上帝。於是大雨即至、洽于四海。
- (10) 『進搜神記表』(『初学記』卷二一紙第七)

臣前聊欲撰記古今怪異非常之事、會聚散逸、使同一貫、博訪知之者、片紙殘行、事事各異。

(11) 竹田晃「干宝試論—「晋紀」と「搜神記」の間—」(『東京支那學報』一一、一九六五)。

本稿は文部科学省科学研究費(特別研究員奨励費)の交付を受けた研究成果の一部である。

## 二 「六朝唐代小説史上における諸問題」

### 〈報告〉

溝部良恵

私の発表は「六朝唐代小説史研究における諸問題」です。適当な題が見つからなかったので諸問題ということにさせていただきました。内容としては今回先生が講義されたことと重なる部分もあります。これまでいつも小南先生の論文は読ませていただいたのですが、今回は授業を通して直接先生の研究方法を学ばせていただくことができました。先生は、大胆な仮説をたて、それを膨大な文献で後付けするという方法で、六朝、唐代小説史研究において大きな成果をあげられています。今回の集中講義を通して、先生が普段どのように研究をなさっているのか、ということを知ることができまして、自分の不勉強を恥じるとともに、大変勉強になりました。

私も唐代小説を専攻していきまして、常日頃唐代小説史全体に関わる問題を考えています。それで今回は、自分の考えを文献などで後付けするということはまだできていないのですが、せっかくの機会なので六朝から唐代にかけての小説史の変遷について、考えていることを、二三述べますので、ご批判をいただけたらと思います。

まず従来の六朝唐代小説の研究史の特徴を簡単に説明し、その後で先生の諸論文から、六朝から唐代にかけての小説史の流れを先生がどうお考えになっているのかということを確認した上で、自分の考えを述べてみたいと思います。中国では近代以後魯迅の『中国小説史略』によって、本格的な六朝唐代小説の研究が始まりました。それは中国に